

涅槃経の教え

「わたし」とは何か

古田和弘

選書朋
40

目 次 ● 涅槃経の教え 「わたし」とは何か

第一章 『涅槃経』と真宗

『涅槃経』と親鸞聖人／王舎城の事件と『涅槃経』／『涅槃経』という
お経／涅槃について／『涅槃経』の涅槃

第二章 祀尊の入滅

入滅の予告／鶴林－生と死－／純陀－最後の供養を捧げた人－／二種の
施食／肉身と法身／仏の本性

第三章 如来すなわち涅槃なり

諸行無常／如来は諸行か／法身と応身／「如来は常住にして、変易ある
ことなし」／如来性・大般涅槃

—「わたし」はどのような者なのか

如來とは何か／衆生とは／衆生に仮性あり／貧女宝藏の喻え／「わたし」の發見／大信心は仮性なり

第五章 衆生とは何か（二）

—「わたし」はどのような者なのか

いずれの行もおよびたき身／「仮性」という教えに先立つ教え／『法華經』「一乘」の教え／常不輕菩薩／自性清淨／「仮性」は仮に成る可能性のことなのか

第六章 衆生とは何か（三）

—「わたし」はどのような者なのか

「わたし」が仮に成ること／「わたし」は凡夫なのか／一闡提／「悉有」と「唯除」／なぜ一闡提は除かれるのか

第七章 仏法から除かれる者（一）

「仮性」のない者／「往生」から除かれる者（『大無量壽經』）／五逆を犯した者／「成仏」から除かれる者（『涅槃經』）／一闡提不成仏／一闡提とは誰のことか

第八章 仏法から除かれる者（二）

阿闍世の逆害／頻婆娑羅王／提婆達多／韋提希夫人

第九章 仏法から除かれる者（三）

阿闍世の病／自性清淨心／六人の大臣 六人の宗教家／名医耆婆

第十章 仏法から除かれた者の救い（一）

耆婆の真心／父の声／阿闍世のために涅槃に入らず／月愛三昧／無根の信

『涅槃経』と真宗

第十一章 仏法から除かれた者の救い（二）

ただ一闇提を除くこと／仮性への疑い／救われるはずのない者の
救い／不決定

143

第十二章 私物化してはならない「わたし」

「わたし」とはどのような生き者なのか／「梅陀羅」について

157

あとがき

171

『涅槃經』と親鸞聖人

親鸞聖人は、『涅槃經』^{ねはんぎょう}というお経をとても大切にされました。親鸞聖人の教えの中心になつてているのは、もちろん『大無量寿經』^{だいむりょうじゅきょう}に説かれている「淨土往生」の教えです。この『大無量寿經』を別にすると、数あるお経のなかで、『涅槃經』といふお経に、聖人はことのほか注目しておられることがわかります。

真宗の「立教開宗の書」といわれる、聖人の『教行信証』には、多くのお経の名をあげて、経文が引用されています。その『教行信証』のなかに、『涅槃經』の経文が他のお経に比べて大変多く用いられているのです。このことからも、親鸞聖人がこの『涅槃經』を大切にされたことがうかがわれます。引用文の量の多さばかりではなく、『涅槃經』の教説の内容が、親鸞聖人の「他力の信心」^{たりき}の教えに深くつながつていることがうかがわれるのです。

王舎城の事件と『涅槃經』

お釈迦^{しゃか}さまがご在世の時代、インドのマガダという国の王舎城^{おうしやじょう}で大きな事件が起つたという話は、よく知られています。「王舎城の悲劇」といわれています。マガダ国の王子である阿闍世^{あじやせ}が、父の頻婆娑羅王^{びんぱしゃらおう}を殺害したのです。この話は、遠い昔の遠い国での出来事を伝えていただけではなく、いつの時代の人間も、人間という生き者は、哀れで悲しい現実を生きていることを教え、そしてその悲しみからの救いを教えていたのです。このために真宗の伝統において、とても大切にされている話なのです。

父を殺した阿闍世は、一方では、自分の犯した罪を罪と認めようとはしませんでした。しかしもう一方では、どのように正当化しようとしても、心のどこか奥底で正当化しきれない悩みをもっていました。その悩みを縁として、人間として生まれてきたことの意味、そして人間として生きていくことの意味を深く思い知らされるようにな

つたのです。その自覚が阿闍世を仏法への帰依に導き、その帰依がまた、人間として不安のない心豊かな人生に阿闍世を導いたのです。

このような阿闍世の罪と、その罪によって心の奥底からにじみ出る苦悩と、そしてその苦悩からの救いとが、実は、『涅槃經』というお経に正面から取りあげられ、詳しく説かれているのです。そしてこの教えに、親鸞聖人が深く注目されたというわけです。

阿闍世の母は韋提希^{いだい}といいます。殺された頻婆娑羅王の后です。夫の頻婆娑羅王は、お釈迦さまを深く尊敬し、教えが榮えることを念願していました。教えを喜びながら、穏やかに、そして心豊かに暮らしていたのです。韋提希夫人は、そのような夫を心から敬愛^{けいあい}していました。ところが、こともあるうちに、自分が産み、大切に育ててきたわが子、阿闍世が愛する夫を死にいたらしめたのです。わが子、阿闍世は父親を殺したばかりではなく、夫の命を救おうとした自分にも、怒りとともに刃を向けて、殺害しようとしたのでした。幸いにして、居合わせた大臣たちがとどめたために殺さ

れずにはすみましたが、韋提希夫人は王宮の奥深くに閉じ込められることになつたのです。

韋提希にしてみれば、自分には何の落ち度もないのに、平穀な暮らしが突然取り壊され、一転して悲しみのどん底に突き落とされたのです。そのような悲しくつらい出来事が自分の身にふりかかるとは、韋提希は夢にも思つていなかつたことでしょう。韋提希という女性の、このような嘆きと絶望と、そしてそこからの救いについて説かれているのが『觀無量寿經』^{かんむりょうじゅきょう}というお経です。このお経の教えについては、わたしたちは東本願寺から出版されている書籍の『現代の聖典』によつて詳しく述べることができます。

そこで、わたしたちは、『涅槃經』によつて、阿闍世の罪と救いについて学びたいのですが、『涅槃經』には、阿闍世のことが取り上げられるに先立つて、親鸞聖人が重要視され、また、わたしたちがよくよく学んでおかなければならぬいくつかの大切な教えが説かれています。これからしばらく、これらの教えについて話をすす

めでいく」とにしたいと思います。

なお、いままで「お釈迦さま」という言い方をしてきましたが、これは、わたしたちの敬愛の気持ちを込めた呼び方であります。正しくは「釈迦牟尼仏」とお呼びしなければなりません。「釈迦」は当時のインドにいろいろあつた種族のうちの「釈迦族」を意味しています。「牟尼」は「尊い人」という意味、「仏」は「佛陀」のことです「目覚めた人」という意味です。それで、「釈迦牟尼仏」は「釈迦族の尊い人であり、目覚めた人」というほどの意味になりますので、これを略して「釈尊」とお呼びしているのです。いまからはそのように、お呼びすることにしたいと思います。

『涅槃經』というお經

さて、『涅槃經』ですが、詳しくは『大般涅槃經』といいます。それは「偉大な完全な涅槃について説くお經」というほどの意味です。この『大般涅槃經』というお經には、二種類のお經があります。その一つは、お經のなかでも、もっとも成立が古く、

仏教の基本となる教えを伝えている「原始經典」と呼ばれる部類（「阿含部經典」とも呼ばれます）に含まれている『大般涅槃經』です。いまひとつは、それよりも幾分おくれてまとめられた「大乘經典」といわれる部類に属する『大般涅槃經』なのです。どちらの『涅槃經』も、釈尊が八十年の生涯を終えて死を迎えるとされる、仏のご臨終りんじゅうをテーマにしています。しかし、はじめの「原始經典」に含まれている『涅槃經』は、釈尊のご臨終のありさまを克明に伝えているお經ですが、もう一方の「大乗經典」に分類されている『涅槃經』の方は、臨終そのものよりも、仏のあり方、そして仏の教えが差し向けられているわたしたち衆生しゆじょうのあり方を説いています。

このたび学ぼうとしているのは、後の方の「大乘經典」の『涅槃經』です。このお經は、仏が亡くなるということはどのようなことなのか、その意味を問うことからはじまつて、そもそも釈尊は、なぜ仏と言われるのか。そして、仏とはどのような存在なのかということを明らかにしようとしています。さらに、仏の慈しみによつて、目覚めることが願われ、安樂の状態に導こうと願わわれている、わたしたち衆生しゆじょうというの

は、一体どのような生き者として、いま生きているのか、それを教えようとしているのです。つまり、「わたし」とは何かということを知らせようとしているのです。

そのような願いがかけられているにもかかわらず、わたしたち衆生は欲望に支配され、自分の尺度だけでものことを判断しているのです。自分のためにほかの生き者の命が損なわれることに何のためらいも感じないで、それでまったく問題はないと思い込んでいるのです。それなのに、いつも不満を抱き、また内心では老いることを恐れ、病むことを恐れ、死ぬことを恐れているのです。うわべでは何も問題はないと思い込みながら、心の奥底では自分にも説明のつかない不安を抱きながら生きているのです。これでは、意味ある人生を心底から納得して過ごし、静かな感謝のうちに生涯を閉じることなどあり得ないでしょう。

これが、わたしたち衆生の現実であると教えられていますが、それは、阿闍世の現実と状況こそ異なりますが、性質としては同じであると認めざるを得ないので。そのような衆生には、阿闍世が目覚めたのと同じ性質の目覚めの機会が用意されている

というのが、「大乗經典」の方の『涅槃經』の教えなのです。

涅槃について

『涅槃經』というお經の名前にある「涅槃」という言葉について、いま、四つの意味を考ええてみることができます。そして多くの場合、その四つの意味が重なり合って用いられていると思われるのです。

その第一は、炎のように燃えさかる「煩惱」^(ほんのう)が消滅した状態を「涅槃」といいます。人間のさまざまな悩みや苦しみは、どうして起こつてくるのかといえば、それは、自分が心に引き起こす「煩惱」を原因として起こる、というのが釈尊の教えです。そして、苦悩の原因である「煩惱」が取り除かれて、静寂な状態にいたれば、それが「涅槃」であると教えられました。人は「煩惱」をなくすることにより、愛にも憎しみにもどらわれず、欲望にも支配されず、道理に背くこともなくなつて、心身ともに静かで穏やかな状態にいたると教えられたのです。

ところが、その平安な境地のもつとも完全な状態を求めるトすれば、それはどのような状態であるのかといふことが厳しく問い合わせられるようになりました。仮に厳しい修行によって、みずから「煩惱」と戦つてこれを克服し、心身ともに淨らかになれば、それはそれで、苦惱のない平安な境地に到達したことになります。しかし、身体が残っているかぎり、どうしても身体のはたらきに支配されたり、束縛を受けたりします。したがって、「煩惱」が取り払われたといつても、それはまだ完全な「涅槃」とはいえないわけです。それでは、完全な「涅槃」とはどのような状態なのかといえば、それは心身ともに一切の制限や支配や束縛から解放される状態、つまり人の「死」を意味するということになったのです。これが第二に考えられる「涅槃」の意味です。

こうして「涅槃」は、「煩惱」から解放された状態を指すとともに、「死」をも意味することになったわけです。釈尊のご臨終のありさまを詳しく伝えてる「原始経典」の方のお経が『涅槃經』と名づけられているのは、このような意味からなのです。

しかし、仏教は決して「死」を最終の目標にしているわけではありません。生まれ

てから死ぬまで、その間をどのように生きていくのかといふことが問題にされているのです。そこで、「大乗」という新しい思想がおこつてくると、「涅槃」にもうひとつの意味が加わりました。それは「覺り」というような意味で、これが第三の意味になります。

これは、「維摩經」という大乗經典にみられる「不斷煩惱入涅槃」(煩惱を断ぜずして涅槃に入る)と説かれている、その「涅槃」なのです。本来は「煩惱」が断じられたことを「涅槃」というのですが、ここでは「煩惱」をなくさないままで「覺り」を得るというのです。完全な「覺り」を得れば、「煩惱」が「煩惱」としてのはたらきを失つてしまつて、「煩惱」が妨げになることはないということです。

なお、親鸞聖人の「正信偈」にも「不斷煩惱得涅槃」と詠われていますが、聖人がここで「涅槃」と言つておられるのは、「覺り」ということではなくて、「往生」を意味していると思われます。

ところで、「涅槃」が「覺り」を意味するとすれば、そこに大きな問題が残ります。それは、「覺り」ということになると、覚ることができると、覚ることができない場合とを考えなければならないからです。もつとはつきり言えば、覚ることができない人と、覚ることができない人とができるのです。これでは、完全な「涅槃」といえるのか、「大般涅槃」といえるのか、ということになります。この問題に応えようとしているのが、いまの『涅槃經』というお經なのです。これが「涅槃」の第四の意味なのです。ですが、『涅槃經』では「真実そのもの」を「涅槃」と名づけていたと思われます。「真実」とは、いつでも、どこでも、誰にでも、ゆきわたってはたらいているものなのです。例外ということがないのです。

『涅槃經』は釈尊の「涅槃」つまり臨終を目前にして、仏の死とはどのようなどとなのかを問いつつ、「涅槃」とは何であるのかについて、従来の見方にとらわれず、

新たな「涅槃」観を明らかにしようとしています。

そして、結論をいえば、「真実そのもの」を「涅槃」と呼ぶことになるのです。それではその「真実そのもの」は、どのようにはたらいているのかといえば、それは、「すべての人が例外なく仏としての本性をもつてている」ということ、したがって「すべての人が例外なく仏に成る」ということとしてはたらいているのです。つまり、「すべての人が例外なく仏に成る」ということが「真実」だということであります。そしてその「真実」に、あらためて気づかされ、目覚めることが願われているわけです。

これをわたしたちは、次のように受けとることができるのでないでしょうか。釈尊は「すべての人が例外なく仏に成る」ということを、『涅槃經』においてわたしたちに教え示されました。その釈尊がまた、『大無量寿經』に、阿弥陀如来という仏が「すべての人を例外なく淨土に往生させたい」と願われ、その誓願がすでに成就していると説いておられるのです。その一つに相通するものがあることに、わたしたちは気づかせてもらえるのではないでしょうか。

釈尊の入滅

入滅の予告

人が「死」くなることを「入滅」とか「入涅槃」とか言います。『涅槃經』というお経は、釈尊のご入滅の直前の教えという形をとっています。「拘尸那城（クシナガラ）」というところに滞在しておられた釈尊は、みずからの臨終の近いことを予告されるのです。「わたしは今日、涅槃に入ろうとしている。もし疑問に思っていることがあるならば、何でも今のうちに尋ねるがよい。それが最後の問い合わせとなるであろう」と。それは、二月十五日の早朝のことであつたと記されています。

『涅槃經』といふお経は、このような釈尊のご臨終の予告からはじまって、釈尊によるさまざまな説法を四十巻にわたって記しているのです。そこに非常に大切な教えが含まれています。そして、四十巻の終わりにいたつても、釈尊のご臨終のことは描かれていません。この点が、前号に述べました、同じ経名の「原始經典」に含まれる『涅槃經』とは大きく異なるところです。

さて、釈尊が間もなく死くなろうとしておられることを知った者たちは、驚き、悲しみ、うろたえて、釈尊のおられる拘尸那城の「娑羅（シャーラ）」という樹の繁る森に集まつて来ました。驚きのあまり身の毛がよだち、悲しみのあまり全身の毛穴から真っ赤な血をにじませて集まつて来たといいます。出家の比丘や比丘尼、在家の男女の信者たちばかりではなく、あらゆるところから、あらゆる生き者が集まつて來ました。これらの大群衆はそれぞれに悲しみの想いを抱きながら、釈尊に最後の供養を捧げようとしました。しかし、釈尊は、その者たちの供養はお受けになりませんでした。それは、やがて、「純陀（チュンダ）」という人の供養を受けることにしておられたからです。

鶴林—生と死—

大群衆が娑羅の森に集まつて來たとき、それまで青々と繁っていた娑羅の樹の葉の色が真っ白に変わつたといいます。それはちょうど、鶴の白い羽のようであつたと書